

憎まれたイエス

ヨハネの福音書 7章 1-13節

はじめに

ヨハネの福音書を少しずつ読み進めてきましたが、今日から7章に入ります。7章の出来事は、2節にあるように、「**仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいて**」いる時に起こりました。「仮庵の祭り」というのは、ユダヤ人の三大祭りの一つで、毎年、秋に行われました。秋の収穫を祝う「収穫感謝祭」でもありました。「仮庵の祭り」は、ユダヤ人の三大祭りの中でも、最も盛大に祝われる祭りのようです。「仮庵の祭り」は、一週間行われて、この一週間、ユダヤ人たちは「仮庵」に住まなければなりません。「仮庵」というのは、草や木、葉っぱや枝などで作った「仮小屋」のことです。ユダヤ人たちは、この秋の一週間は、自分の家を持っていたとしても、わざわざ庭やベランダに「仮小屋」を作って、そこで生活しなければなりません。英語では、この「仮庵の祭り」は、「キャンピング・フェスティバル」と訳されることもあるそうです。つまり「仮庵の祭り」の間、ユダヤ人たちは野外でキャンプ生活をするのです。キャンプというのは、普段の生活から離れて、自然の中で不便な生活をします。しかしそれはとても楽しいものです。ですからユダヤ人たちも、この「仮庵の祭り」をととても喜び、楽しんだようです。

しかし、なぜユダヤ人たちは、このような「仮庵の祭り」を祝わなければならなかったのでしょうか。そのことについて神様は、レビ記23:43でこう言われます。「**これは、あなたがたの後の世代が、わたしがエジプトの地からイスラエルの子らを導き出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを知るためである**」。イスラエルの民は、エジプトの奴隷状態から神様によって解放されました。しかしイスラエルの民は、約束の地に行くまでの四十年間、荒野の旅をしなければならませんでした。その荒野の旅の間、イスラエルの民は、「仮庵」、つまり「仮小屋」で生活したのです。そのことを忘れないために、ユダヤ人たちは、毎年一週間、「仮小屋」でキャンプ生活をするのです。

私たちは今、「仮庵の祭り」を祝うことはありません。しかし、聖書は、私たちクリスチャンは、「**地上では旅人であり、寄留者である**」(ヘブル11:13)と書いています。そして、「**天の故郷**」(ヘブル11:16)を目指して旅をしているのだと書いています。私たちの地上の生涯は、本来キャンプ生活なのです。しかし私たちは、この地上の生涯で、あらゆる荷物を持つとします。そして、この地上の生涯がすべてであるかのように、どっしりと腰を据えて生きてしまいます。「仮庵の祭り」は、私たちは本来、旅人であることを思い出させてくれます。そして「天の故郷」こそ、私たちの永遠の住まいであることを思い出させてくれるのです。

1. イエスに対する三者の態度

さて、今日の聖書箇所は、「ユダヤ」で行われる「仮庵の祭り」に、イエス様は上って行くべきか、それとも上って行くべきではないかという問題を巡って、イエス様の「兄弟たち」とイエス様が言葉を交わしています。

今日の聖書箇所には、「ユダヤ人たち」と「群衆」とイエス様の「兄弟たち」が登場してきます。この三者は、イエス様に対して、それぞれ違った態度を示しますが、ある共通したものも持っています。

まず「ユダヤ人たち」ですが、この「ユダヤ人たち」というのは、ユダヤ人一般を意味するのではなく、イエス様に敵対する「ユダヤ人の宗教指導者たち」のことです。彼らは、1節にあるように、イエス様を「殺そうとして」いました。なぜユダヤ人の宗教指導者たちは、イエス様を殺そうとしていたのでしょうか。5：18を見ると、「神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである」とあります。イエス様は、御自分こそ「神の子」と宣言なさいました。するとユダヤ人の宗教指導者たちは、「そんなはずはない、神を冒瀆している」と腹を立てて、イエス様を憎み、イエス様を殺そうとまで思うようになったのです。

次に「群衆」ですが、群衆の態度は12-13節に書かれています。群衆は、イエス様について公然と語りませんでした。彼らは、小声でイエス様について話し、「良い人だ」とか「群衆を惑わしている」とか、様々な噂話をしていました。なぜ群衆が、公然と語らず、小声で話していたかということ、ユダヤ人の宗教指導者たちを恐れていたからです。群衆は、ユダヤ人の宗教指導者たちほど、イエス様に敵意を持っていませんでした。しかしイエス様を公然と語ったり、イエス様を証して、身の危険を冒すほど、イエス様を支持していたわけではなかったのです。

第三に、イエス様の「兄弟たち」ですが、この「兄弟たち」というのは、イエス様の弟たちのことです。マルコ6：3を見ると、イエス様には、「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン」という弟たちがいたようです。さらにイエス様には、「妹たち」もいたとあります。イエス様は、処女マリアから産まれましたから、当然、一番初めに生まれた「長男」なのです。その後、マリアとヨセフの間に、弟たちや妹たちが次々と産まれていったようです。その弟たちは、3-4節でイエス様にこう言うのです。「ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい」。

イエス様はこの時、「ガリラヤ」を巡っていました。ガリラヤで、病人を癒し、悪霊を追い出し、説教を語っていたのです。しかしイエス様の兄弟たちは、「仮庵の祭り」が近づいてきたので、イエス様に「ユダヤに行きなさい」と言うのです。「仮庵の祭り」の一週間は、ユダヤに多くの人が集まって来ます。特にユダヤの「エルサレム」には、多くの人が集まります。ガリラヤは、田舎の地方でした。それに比べてユダヤ、特にエルサレムは、大都会でした。イエス様の兄弟たちは、「この仮庵の祭りが行われる今こそ、大都会のエルサレムに行ってあなたの働きを多くの人に見せなさい」と言うのです。「こんなガリラヤの田舎で働きをするのではなく、大都会であなたが神の子であることを示しなさい」と言うのです。イ

イエスの兄弟たちは、多くの人にイエス様を知ってもらおうとします。そして、「仮庵の祭り」のエルサレムほど、絶好の時と場所はないと考えたのです。

しかし6節を見ると、「**兄弟たちもイエスを信じていなかった**」とあります。イエス様の兄弟たちは、イエス様の奇跡を見、イエス様の説教を聞いていたと思います。そのため、多くの人にイエス様を知ってもらいたいと思いました。しかし、彼らはイエス様を信じていなかったというのです。ここには、「兄弟たちは」ではなく、「兄弟たちも」とあります。ユダヤ人の宗教指導者たちは、イエス様を殺そうとしていました。群衆は、イエス様のことを公然と語ることを恐れていました。そのようなユダヤ人の宗教指導者たちや群衆と同じように、イエス様の兄弟たちも、イエス様を信じていなかったというのです。イエス様の奇跡を見、イエス様の説教を聞き、イエス様のことを多くの人に知ってもらおうとする、それだけでは、イエス様を信じることにはならないのだというのです。

2. イエスの時、あなたがたの時

では、イエス様の兄弟たちには、何が足りなかったのでしょうか。イエス様は6節で、彼らにこう言われます。「**わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています**」。イエス様は、「わたしの時」と言われるように、御自分の「時」を持っておられました。しかしイエス様の「時」というのは、御自分が決めた「時」ではなく、父なる神様が定めた「時」でした。イエス様は、父なる神様が定めた「時」に御自分を従わせていたのです。旧約聖書の伝道者の書3章には、こういう言葉があります。「**すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みに時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を抜くのに時がある。殺すのに時があり、癒やすのに時がある。崩すのに時があり、建てるのに時がある。泣くのに時があり、笑うのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。石を投げ捨てるのに時があり、石を集めるのに時がある。抱擁するのに時があり、抱擁をやめるのに時がある。求めるのに時があり、あきらめるのに時がある。保つのに時があり、投げ捨てるのに時がある。裂くのに時があり、縫うのに時がある。黙っているのに時があり、話すのに時がある。愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦いの時があり、平和の時がある。…神のなさることは、すべて時にかなって美しい**」(伝道者の書3:1-8, 11)。すべての営みには、神様が定めた「時」があると聖書は教えています。そして、それはすべて、「時にかなって美しい」と言うのです。つまり神様が定めた「時」は、最善であると言うのです。

イエス様は、神様の「時」の中で生きていました。御自分の計画やアイデアの「時」の中で生きていたわけではありません。常に神様の「時」を意識し、神様の「時」に従って生きておられたのです。イエス様の兄弟たちはどうでしょうか。「あなたがたの時はいつでも用意ができています」とイエス様が言われたように、彼らの「時」は、「いつでも」なのです。神様の「時」など意識していないのです。「いつでも」、自分が良いと思う時が、彼らの「時」なのです。彼らは、年に一度多くの人が集まるエルサレムの「仮庵の祭り」こそ、イエス様の「時」だと考えたのです。しかしイエス様の「時」は、その「時」ではなかったのです。

イエス様の「時」、神様の「時」は、まだ来ていなかったのです。

イエス様を信じる人は、神様の「時」の中で生きていきます。自分の「時」ではなく、神様の「時」を意識して生きていきます。しかし私たちは、イエス様の兄弟たちのように、自分の「時」に、イエス様を従わせようとしてしまうことがあるのかもしれませんが。「イエス様、この『時』までに、これを与えてください」「この『時』までに、癒やしてください」「この『時』までに救ってください」と、イエス様の「時」、神様の「時」を無視して、自分の「時」の中にイエス様を生かそうとしてしまうことがあるかもしれません。イエス様の兄弟たちは、イエス様の「時」を信じていなかったのかもしれませんが。イエス様の「時」こそ、神様の「時」であり、その「時」こそ、最善であると信頼できていなかったのかもしれませんが。私たちは、イエス様の「時」、神様の「時」に信頼することが大切なのではないのでしょうか。イエス様の「時」、神様の「時」こそ、私たちにとって「最善の時」であり、最も「美しい時」であるからです。

では、イエス様がまだ来ていないという「時」とは、どんな「時」なのでしょう。イエス様は、どんな「時」を待っていたのでしょうか。このヨハネの福音書をもう少し読み進めて、13:1を見ると、こう書かれています。「**過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた**」。イエス様が待っていた「時」というのは、「仮庵の祭り」ではなく、「過越の祭り」でした。それは、イエス様が十字架に架かり復活し、天に昇られる「時」でした。イエス様は、「仮庵の祭り」で人々に奇跡を見せ、説教を聞かせることで、御自分が「神の子」であることを人々に示そうとはしませんでした。イエス様は、人々に十字架の苦しみを見せることで、また復活した姿を見せることで、御自分が「神の子」であることを人々に示そうとされたのです。奇跡ではなく、十字架と復活こそ、イエス様が「神の子」であることのまことの「しるし」なのです。

私たちは、イエス様が本当に「神の子」であるのか、本当に神様御自身であるのかを知ろうとする時、十字架と復活を見つめなければならないのです。イエス様の奇跡をいくら見つめても、イエス様を信じることはできないのです。イエス様の兄弟たちもそうでした。イエス様の兄弟たちは、イエス様の奇跡を見、説教を聞いていました。しかし、イエス様を信じていなかったのです。彼らは、使徒 1:14 を見ると、イエス様が十字架に架かり復活し、天に昇られた後、最初の教会の祈禱会の中にいたと書かれています。彼らは、イエス様の十字架と復活を見て、イエス様を本当に信じるようになったのです。そして弟のヤコブは、エルサレム教会の指導者となるのです（ガラテヤ 1:19）。イエス様のあの悲惨な十字架の死と、栄光に満ちた復活を見つめなければ、私たちの中に本当の信仰は生まれてこないのだと思います。

3. 世に憎まれ、世を愛されたイエス

最後に、7節のイエス様の言葉を見て、終わりたいと思います。「**世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証して**

いるからです」。イエス様は、世に憎まれました。命が狙われるほど、殺したいと思われるほど、憎まれました。なぜなら、イエス様が世の行いが悪いことを証ししているからだと言われます。つまり、罪を指摘しているからです。しかしイエス様は、イエス様の兄弟たちに向かって、「世はあなたがたを憎むことができない」と言っています。なぜ世は、イエス様の兄弟たちを憎むことができないのでしょうか。それは、彼らが世に罪を指摘していないからです。群衆のように、世を恐れて、公然と語ることをしないからです。

イエス様がここで語っている「世」とは、第一に、ユダヤ人の宗教指導者たちと言えるでしょう。しかし、世を恐れて、公然と語ることもせず、世に憎まれてもいない、イエス様の兄弟たちや群衆も、世と同化した世そのものだと言わざるを得ません。

イエス様は、ヨハネ 15：18-19 で、こう言われます。「**世があなたがたを憎むなら、あなたがたより先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです**」。イエス様は、イエス様を信じる人は、イエス様と同じように世に憎まれると言われます。もし憎まれていないのなら、世を恐れて、語るべきことも語らず、世と同化しているだけだと言われるのです。

私たちは考えさせられます。私たちは、世に憎まれているだろうか。世に憎まれるほど、語るべきことを語っているだろうか。できるだけ世に憎まれないように、世と同化して生きようとしていないだろうか。使徒パウロは言います。「**この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります**」。私たちは、「世」と同化するのではなく、「世」との違いを見せていかなければなりません。その違いは、「神のみこころ」に生きる生き方です。それは、神の「時」に生きる生き方とも言えます。世は、自分の「時」を生きます。自分の計画やアイデアの「時」の中で生きていきます。しかし私たちは、イエス様の「時」、神様の「時」の中で生きていくのです。イエス様の「時」、神様の「時」こそ、最善であると信頼して生きていくのです。

また世は、しるしを求めます。驚くべき奇跡を求めます。また目に見えるものを求めます。しかし私たちは、十字架と復活を誇りとしていくのです。十字架の道にこそ、真実があると信じて、私たちもまた十字架を負って生きていくのです。イエス様と同じように、たとえ世に憎まれることがあったとしても、恐れずに、公然と十字架と復活を証ししていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされたイエス様は、世に憎まれ、命を狙われました。それでも、神様の「時」の中で生き、世の罪を示し、十字架と復活の道を歩まれました。どうか私たちが、十字架と復活を通して、イエス様を見つめることができますように。私たちを本当の信仰に生かし、イエス様の「時」、神様の「時」の中で生かしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。